

## あつたらいいな

ドラえもんや、人気の理由のようです。私もスマートフォンを使いますが、その機能の一つに、本体に話しかけるとすぐインターネット検索や使いたい機能を立ち上げるこ



穏やかな声とまなざしの中で

とが出来るといものがあ

「タイムマシン」、「どこでもドア」、「タケコブター」だそうですが、どれも「あつたらいいな」と思う夢のような道具たちです。そんな夢の道具とまでは言えませんが、今や多くの人が持っているスマートフォンに代表される携帯型機器類は、いつでもどこでも手軽にインターネット接続や多くのアプリソフトが搭載できる機能や、何といつても画面を指でタッチする姿がカッコよく見えることが、人気の理由のようです。

「あつたらいいな」が次の新たな道具を生み出してきました。重い障がいのある人

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねナースのつぶやき  
たねナースには白衣もユニフォームもありません。私が看護師になったばかりの頃は、白衣を着るのが当たり前で、「白衣の天使」なんて呼ばれたりもしていました。最近は機能性やファッショニステ重視したユニフォームや、私服スタイルが主流になりつつあります。小さなたねの私服スタイルは、私にとつても新鮮で、その日の利用者さんの顔を浮かべながら服とエプロンを選んでいきます。



医療法人にのさかクリニック  
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3  
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052  
E-mail chisanatane@tune.ocn.jp  
ブログ <http://chisanatanetane.blog.ocn.ne.jp/blog/>

ボランティアさん募集!!  
小さなたねの日中お預かりの中で、利用者さんと一緒に「はた織り機」を使って、「さおり織り」を時々織っています。個性豊かな色合いの布が、だんだん増えてきました。その布を活かして、一緒に小物を制作して下さる方を募集しています。ロックミシンの寄付がありましたので、活用したいと思っています。素敵な布で、形あるものにできたらと願っています。  
(担当：渋谷)

【編集後記】通信担当のEです。記事の大半を水野さんが書いていて、このペースで続くのか勝手に心配しています。皆さん、投稿を下さいませんか。文章や川柳、イラスト、お子さんの作品も大歓迎です。お待ちしております！  
(E)



「いのち」を考える

医療的ケアの必要な方たちの容姿は、気管切開された喉にカニューレが装着され、人工呼吸器の回路を繋げていたり、経管栄養のためのチューブが鼻から出ていたり、血液の中の酸素濃度を測るモニターコードがついていたりと、色々なチューブやコードに繋がれた状態です。私の娘もそうなのですが、最近はずレッチャータタイプのバギーに乗って、外出する機会も増えてきました。

ある日、買物に出かけますと、小さな子どもたちが、じっと見ていきます。一度すれ違っても後から追いかけてくる子もいます。小学校低学年くらいの男の子が、「死んどっとうっ…」と、自分の母親に尋ねたりもしています。母親は顔を強ばらせ、無言でグイと息子の手を引っ張って行ってしまいました。そのような子どもたちとは対照的に、周囲の大人たちは、配慮してから



たくさんの医療機器の中で

見てはいけないことのように目線をそらしながら、でも少し気になるオーラを出しつつ通り過ぎていきます。そんな周囲の出来事を知ることもなく、スヤスヤと穏やかに眠り続ける娘、その傍らで、意地悪く人間ウォッチングを楽しんでいる私がいいます。

「死んだ金魚をトイレに流すな——」いのちの体験」の共有』（集英社新書、2009年）の著者で、長年スクールカウンセラーとして子どもたちと向き合ってきた近藤卓氏は、著書の中で「自らのいのちの重みを知っていく過程には、ある分岐点がある。それは10〜12歳の頃、明確な分かれ道となって訪れる」といいます。近藤氏によれば、その時期は人間がなぜ死ぬのか、やがて自分も死んでいくのかという恐怖と不可思議さを味わう時期だということです。

そして、それは思春期の子どものにとって、一人では持ちきれない重荷なので、「いのちの体験」を誰かと共有することで、その後の人生に重要な影響を与えることに繋がっていくのだそうです。

あの日、重い障がいのある娘を見て、「死んどっとうっ…」と尋ねた男の子は、これまで見たこともない姿を目の当たりにして、恐怖を感じていたのかもしれない。そうならば、「いのちの体験」はそこから始まっていくことでしょうか。顔を強ばらせながら行ってしまった母親にとっても、いのちの共有体験が必要だったのかもしれない。

幼い子どもそのままさしや問いかかけは、時に残酷で鋭く、人間として根源的な問いを導き出します。私たち大人は、そこから目を背けず、逃げ出さずに立ち止まる、ゆとりが必要だと思えます。そして、「いのちの体験」をもっと大切に、学ぶことを求めていかなければなりません。これからの未来を担う子どもたちが、いのちの大切さを学び、自尊感情を育んでいくことをしなければ、社会はますます殺伐としてしまいます。私たちが安心して暮らすことができ、互いに思いやり、尊重し合う生き方は、実は身近なところでの体験や共有し合う中から創

られていくものです。目に見えない「いのち」はそうやって、感性を豊かにしながら学びつ続けていくことではないでしょうか。

家族・学校・職場・地域等々、社会の中で出会う一人一人と、自分のいのちの向き合いの中で、いのちについて考える機会が多くあるのに、つい通り過ぎてしまします。今一度、立ち止まる勇氣とゆとりを持ち続けていたいと考えます。人生は、急いでも、ゆっくりと生きている、変わらない「時間」を刻み続けているのですから。



色々な出会いと繋がり中で生きる

高橋 厚子

娘は脳性マヒ・関節拘縮症  
特別支援学校中学部2年生

いつも絵本と



娘は小さい時から絵本が大好きです。

生後十ヶ月の写真では、絵本「にじいろのさかな」にくぎつけです。その頃は、音に超・超・超・敏感で、夜なかなか寝てくれない日々でした。少ない絵本の中から「にじいろのさかな」を繰り返し読んでいました。私にとっては、障がいと向き合うことと寝不足のきつかった日々を思い出す、苦笑いの絵本でもあります。成長と共に絵本の数は増え、娘のお気に入りはその時々で変わっていきました。私も苦笑いではない楽しい思い出の絵本が増えました。

最近、娘の最期（人生の最後）の時に絵本を読んでいたと思うようになりました。先輩お母さんにそのことを話すと、「主治医に伝えておくべき」とのアドバイス。うん確かにそうだ、伝えないと実現しない、娘が元気な今だからこそ話せる……ということで、小児科の定期受診の時、主治医の先生へ話しました。



絵本「にじいろのさかな」  
マーカス・フィスター 作  
谷川俊太郎 訳  
講談社（1995年）

「娘の最期のことでお願いがあります。過度な延命治療は考えていません。どこから過度になるのか、今は決められません……。そして、最期は絵本を読みながら、できるだけ穏やかに迎えたいです」  
先生は最初はびっくりした表情で、その後は穏やかな微笑みで聞かれ、私が話し終わると「わかりました」と言われました。  
いつかどうしても最期の時が来るのならば、どうか、娘が聞く最後の声が、お父さんお母さんの声でありますように。  
改めて娘より長生きしなくちゃと思う、今日この頃です。

本の紹介





『障害者の経済学』  
中島 隆信 著  
定価1500円+税  
東洋経済新報社  
(四六判、2006年刊)

子供を自立させることをためらう障害者の親、設備は立派だがニーズにこたえきれていない施設、使いづらい運賃割引制度など、障害者福祉はさまざまな矛盾を抱えています。本書では、同情や単純な善悪論から脱し、経済学の冷静な視点から障害者の本当の幸せや福祉の現場の正しいインセンティブを考えます。（本書より）

「アベノミクス」で、経済の浮き沈みが注目されている昨今、生活保護や年金制度の見直しが高声に出ています。社会的弱者と呼ばれる方々の暮らしが、どのように守られていくのか注目しなければなりません。


障がいのある方々の暮らしも例外ではありません。本書は2005年に出版されたものですが、「障害」関連の書籍では異例ともいえる、経済学者の視点から書かれています。社会構造の仕組みから考えた「新たな障害者論」が展開されています。



日	月	火	水	木	金	土
						1
2 休	3	4	5 	6	7 	8
9 休	10	11	12 	13	14 	15
16 休	17	18	19 	20	21 	22
23 休	24	25	26 	27	28 	29
30 休						

 絵本の読み聞かせ ※予定ですので事前にお尋ね下さい。

 「楽塾」訓練会 ※今月は午前中のみ

 たね食堂 ※オープン予定を記載していますが、今月はスタッフの都合で、お休みさせていただきますことがあります。



重度障害の兄に向けられる視線に、小1の妹が一言…

by:endo

## 医療型短期入所 について

在宅で医療的ケアを必要とする障がい児(者)を介護している方が、病気や事故、出産やレスパイト(休憩)などで一時的に介護ができない場合、入院設備のある病院などで宿泊を伴った日常生活上の支援を行うことを「医療型短期入所」といい、無床の診療所などで宿泊を伴わない支援のことを「医療型特定短期入所」(小さなたねはこれです)といいます。現在、福岡市内では医療型短期入所が4事業所、医療型特定短期入所が2事業所となっております、少しずつ増えてきました。しかし、受け入れてできる対象者

に年齢制限や人工呼吸器使用の有無があつて、本当に必要な方々のニーズに添えられるまでには、まだまだ時間が必要なようです。事業所側としては、普段の様子が把握できない状況で医療的ケアの濃厚な方をいきなり預けられても、安心・安全な対応ができないのが、事業を慎重に進める理由のようです。しかし、一方でそれは利用する側の方たちにとっても同様で、ケアの手順を十分に把握できていない場所へ、安心して託すことができないという理由から、二の足を踏んでいる状況があります。これは互いに歩み寄って、時間をかけ造り上げていくほか解決の道はないようです。事業所とコンタクトを取りながら、短い時間でも利用し



ておく。利用者やスタッフ間のコミュニケーションを大切にすること、いざ本場に利用したいときにスムーズな利用が可能となります。お互いを知ること、なじみの関係を築いていくことが、何よりも大切なことだと思います。